

Concomitant Intraductal Papillary Mucinous Neoplasm in Pancreatic Ductal Adenocarcinoma Is an Independent Predictive Factor for the Occurrence of New Cancer in the Remnant Pancreas

松田, 諒太

<https://hdl.handle.net/2324/4060043>

出版情報 : Kyushu University, 2019, 博士 (医学), 課程博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)

(別紙様式2)

氏名	松田 諒太
論文名	Concomitant Intraductal Papillary Mucinous Neoplasm in Pancreatic Ductal Adenocarcinoma Is an Independent Predictive Factor for the Occurrence of New Cancer in the Remnant Pancreas
論文調査委員	主査 九州大学 教授 馬場 英司 副査 九州大学 教授 小川 佳宏 副査 九州大学 教授 森 正樹

論文審査の結果の要旨

外科治療や補助治療の発達により膵癌の予後は改善傾向であり、それに伴い膵切除後の残膵癌発生は稀でなくなりつつある。本研究は、膵腺管癌（PDCA）に対して膵部分切除術を施行後に、残膵の膵腺管癌（残膵 PDAC）が発生する予測因子を同定することを目的とした。膵部分切除術を施行された 379 例の PDAC 症例の臨床病理学的因子を後方視的に解析した。14 例（3.69%）で残膵 PDAC が発生した。多変量解析において、併存する膵管内乳頭粘液性腫瘍（IPMN）の存在が残膵 PDAC の予測因子であった。組織学的評価では、IPMN 併存膵癌の背景膵に占める膵上皮内腫瘍性病変（PanIN）の密度は、IPMN 非併存膵癌よりも高値であった。以上より、PDAC において IPMN 併存は残膵 PDAC 発生の独立予測因子であり、IPMN 併存膵癌では背景膵に PanIN が増加しているため術後残膵の発癌率が高まっている可能性がある。

以上の成績はこの方面の研究の発展に重要な知見を加えた意義あるものと考えられる。本論文についての試験はまず論文の研究目的、方法、結果などについて説明を求め、各調査委員より専門的な観点から論文内容及びこれに関連した事項について種々質問を行ったが適切な回答を得た。よって調査委員合議の結果、試験は合格と決定した。

なお本論文は共著者多数であるが、予備調査の結果、本人が主導的役割を果たしていることを確認した。